



| | |
|--------------|---|
| Title | ガリアの英雄とナショナル・アイデンティティ：第三共和政フランスの歴史教育と国民形成 |
| Author(s) | 渡辺, 和行 |
| Citation | 阪大法学. 2005, 55(3,4), p. 263-289 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/54945 |
| rights | |
| Note | |

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ガリアの英雄とナショナル・アイデンティティ

——第三共和政フランスの歴史教育と国民形成——

渡辺和行

— 起源神話とアイデンティティ —

二〇〇三年一月下旬に、アンコールワット遺跡をめぐってカンボジアで暴動が起きた。事の発端は、「アンコールワットはタイのもの。カンボジアが盗んだ」とタイ人女優が発言したという噂が、カンボジア人のナショナリズムを刺激し、経済不況下でタイに対する日頃の鬱積していた不満が爆発したものであった。プノンペン市内のタイ大使館やタイ系企業やホテルなどが焼き討ちにあり、外交問題にまで発展した。また二〇〇〇年一二月には、ツタンカーメンの父を探るためにミイラのDNA鑑定を申請した日本の調査団に対して、エジプト政府から許可がおりないというニュースがあった。「古代ファラオがユダヤ人だと分かる可能性はないのか」という地元記者の発言に見られるように、そこにはイスラエルと対峙するエジプトの現在だけでなく、エジプトの起源神話の根底に関わる問題が胚胎していた。さらに二〇〇五年六月の『朝鮮中央通信』の報道（世界で初めてロケットを作ったのは朝鮮『高句麗』）であり、ロケット兵器は「朝鮮民族の知恵と創造的才能、愛国心を示す貴重な歴史遺物だ」にも、

國威発揚の意図を窺うことができる。⁽¹⁾ これらの出来事は、史跡や遺跡や遺物が、今日においてもなおナショナリズムやナショナル・アイデンティティを育む有効な道具であることを示している。フランソワ・フュレも述べるよう、「あらゆる民族^{ブル}は、起源物語と偉大さの記念碑を必要とする」のである。⁽²⁾

」のように、国民の起源神話や遺跡への関心は、邪馬台国論争と同じく近代にならないと生まれない現象である。⁽³⁾ 国民意識が未成立ないし未熟な古代や中世には、起源論争はありえなかった。国民の起源に关心が持たれなかつたからである。国民の起源に広く関心が持たれるようになるのは、国民が優れて歴史的存在となつた一九世紀以降のことである。⁽⁴⁾ というのは、近代に誕生した国民を中心に戸籍が再編されたからだ。フランスと例外ではない。一八三六年に、フレデリック・スーリエが『ラングドックの歴史小説』のなかで「フランス史が作られねばならない」と記したように、一九世紀初めにはフランス人は共有可能な「国民史」をいまだ持つていなかつたが、一八三〇年代からジユール・ミシェル・マルタンによるフランス史の執筆が始まり、一八三四四年に「フランス史学会（la Société de l'histoire de France）」が創設され、世紀末には「国民の物語」を持つことになる。一八九四年には、リセの歴史学教授シャラメが「わがフランス史を知らずして、どうして祖国にすべてを捧げえようか」と発言するまでになるのである。⁽⁵⁾ こうした国民感情の発達には、国民の過去についての知識が根本的に重要であった。⁽⁶⁾ 歴史は国民感情を育み活性化させるのみならず、国民感情やナショナル・アイデンティティは国民史という花を咲かせる腐植土でもあつた。⁽⁷⁾

しかも、ナショナル・アイデンティティは国際環境のなかで形成されるという逆説があることに注意せねばならない。フランスの場合、ナポレオン戦争末期にパリがプロイセン軍とコサック兵に占領されたことや、一八七〇年の普仏戦争でパリがプロイセン軍に包囲されたことなどが、国民意識の形成におおいに与つていた。たとえば、ウ

ジェーム・シューは『民衆の秘密』（一八五六）のなかで、ガリアの英雄ウエルキンゲトリクス（ヴエルサンジェトリクス）を「一〇〇の谷を支配する指導者」と称え、ローマ人によるガリア侵入との類比で一八一四～一五年のプロイセン軍とコサック兵の占領を位置づけていた。⁽⁸⁾

このように、起源への関心が高まるのは近代のことであつた。イポリット・テームが、『現代フランスの起源』第一巻を世に問うたのは一八七五年である。フロベールの『アヴァールとベキュシェ』（一八八二）がケルト考古学やガリアの水盤に熱中したように、フランスにおいても祖先は誰かに関心が集まつた。フランス人の祖先はフランス人なのか、ガリア人なのか。フランス史はいつから始まるのか、ガリア人の時代からか、それともフランク族の到来からか。ポミアンによると、ガリア人に関心が高まつた時期は四つあるという。⁽⁹⁾ 第一に一五世紀末から一六世紀初め、第二に一六世紀後半、第三に一八世紀末から一九世紀初め、第四に一八二〇年代末から一九一四年までの八〇年間である。この第四期に真に国民形成が行われたのである。本稿は、この第四期、とりわけ第三共和政期の歴史教科書を取りあげて、ガリアの英雄に関してどのような歴史像が提示され、ナショナル・アイデンティティが構築されようとしたのかを検討するが、本論に入る前に、フランス史におけるガリアの発見やウエルキンゲトリクスの英雄化について整理しておきたい。

二 ガリアの雄鶲とウエルキンゲトリクス

「ドイツ復活の日はガリアの雄鶲の雄たけびによつて告げ知らされるであろう」⁽¹⁰⁾。このように、マルクスが『ヘーゲル法哲学批判序説』を結んだのは一八四三年末のパリであった。この文章が興味深いのは、『ドイツ・イデオロギー』（一八四二）に結実する初期マルクスの思想的展開という問題を越えて、「ガリアの雄鶲」がフランス

の表象として公認されていたことを、ドイツ人マルクスの一文が物語ついているからである。ガリアの雄鶲（ガルス）の表象は中世にも存在したが、国家や民衆や国民の象徴として意識的に使用されるようになつたのはフランス革命以降であり、一九世紀のロマン主義がこの表象を定着させるにいたつた。シャトーブリアンの『殉教者』（一八〇九）が「野蛮なガリア人」を浪漫的な英雄として叙述していたことや、ヴィクトル・ユーゴーが二五歳のときに発表した『ヴァンドーム広場の円柱に捧げる頌歌』（一八一七）のなかで、「世界を目覚めさせるのはガリアの雄鶲だ」と詠つていたことを指摘しておこう。¹²⁾

ガリアの雄鶲は、ガリア時代の評価の高まりとパラレルな関係にあつた。とりわけ、ガリアの英雄ウェルキンゲトリクスに関心が集まつた。ガリアは、まずローマ人の目を通して論及された。カエサルは『ガリア戦記』のなかで、ガリアの指導者としてゲルゴヴィア（ジエルゴヴイ）とアレシアで戦いを指揮し、捕虜になつたウェルキンゲトリクスについて記している。『ガリア戦記』は、ガリア人の自由のために戦つたウェルキンゲトリクスが、アレシアでローマ軍に包囲されて降伏し、武器も取りあげられて堡壘に座るカエサルの前に引き出されたところで終わつており、その死については触れていない。¹³⁾このようにガリアは、カエサル以外にも、ティトウス・リウィウスやタキトゥスといったローマの歴史家たちの文献と発掘史料から蘇つたのである。

一六世紀に、エチエンヌ・パキエが『フランス考』（一五六〇）のなかでガリアとフランスの絆に論及し、世紀末には「われらが祖先ガリア人」という言葉が初めて表れた。こうして、ガリアの記憶がヴァチカンと戦うフランス教会のガリカニズムに寄与し、アンリ四世が「ガリアの王」と呼ばれていたとはいえ、絶対王政と啓蒙の一八世紀はガリア人について沈黙していた。モンテスキューも『法の精神』のなかで、フランク人を「わが父祖ゲルマン人」と呼んでいる。しかしフランス革命期に、シエイエスが国民とは「ガリア人やローマ人の子孫」だと述べて風

向きが変化する。それゆえ、「一九世紀こそがガリア人を表舞台に連れ出した」と言ってよいだろう。⁽¹⁴⁾ フランス史においてガリアが発見されたのは一九世紀前半であり、世紀中葉にはガリア人はフランス史の一部となつた。ミシェルの『フランス史』第一巻（一八三三）第一章には、ガリア人への共感が示されている。

ウェルキンゲトリクスと戦場のアレシアが神話化されるのも、一九世紀である。ウェルキンゲトリクスは、自由や祖国のための戦いを具現し、勇気と名誉と自己犠牲の代名詞ともなつたが、一八世紀末まで衆人の注目を集めなかつた。彼はいまだ「国民的英雄」ではなく、その名が広く知られるのも一九世紀半ばのことである。一八五八年の『両世界評論』のなかで、ウェルキンゲトリクスは「最初のフランス人」（オマール公）と記述されることになる。それまで、多くの歴史家や年代記作家は、フランス人をガリア人の子孫ではなくフランク人の子孫であると見なし、フランク人の初期の王からフランス史をはじめていた。王党的伝統に立つ歴史叙述では、「最初のフランス人」にして「最初のキリスト教徒の国王」はクロヴィスであった。オルLEAN系の教科書も、フランス史をキリスト教とローマの遺産からはじめていた。一八七〇年でも、「王政の眞の創始者であるクロヴィスからお話を始まる」と記す歴史教科書があつた。また、王政復古下の一八一六年に、セーヌ川に架かるポン・ヌフは国民的栄光を表す一六体の彫像で飾られたが、そのなかにウェルキンゲトリクスは含まれていなかつた。王政のフランスとは無縁であつたからである。しかし一八三〇年以後、ガリアの英雄の記念碑建立が提案されるようになる。⁽¹⁵⁾

こうした傾向を先取りしたのが、「一九世紀のケルト心醉者」と言われたアンリ・マルタンである。ミシェルが、ウェルキンゲトリクスを固有名詞としてではなくてガリアの武将を指す普通名詞として理解したのに対し、マルタンはその存在を証明し、さらに『フランス史』（一八三四）の冒頭で、「西ヨーロッパに最初に住んだ人々はガリア人であり、われわれの本当の祖先である」と述べ、近代のフランス人はさまざまな人種の混交によって作り出さ

れだが、「この混交のなかで支配的なのはガリア人の血だ」と記していた。それでも、一八六一年にマルタンが「ルーヴル美術館の国際色に富む陳列室には全世界の古美術品が展示されているが、わが祖父の古美術品は除かれている」と述べざるをえなかつたように、ガリアの時代はフランス史の周縁的存在でしかなかつた。「われらが祖先ガリア人」という表象は、近代の産物であつた。古代ローマ人がイタリア人のアイデンティティと関わり、ゲルマン人がドイツ人のアイデンティティと関わつたとき、「ローマ人とゲルマン人の狭間にいたガリア人」という歴史表象が作り出されたのである。⁽¹⁶⁾

ガリアの歴史の「国民化」に貢献した歴史家は、アメデ・ティエリである。歴史家オーギュスタン・ティエリの弟のアメデ・ティエリは、アンリ・マルタンにも影響を与えた『ガリア人の歴史』（一八二一八）のなかで、国民主義的なウェルキングトリクス像を提示していた。ウェルキングトリクスの子孫以外にわが父祖はいないと述べ、ウェルキングトリクスの党派は「国民党」と形容され、その軍隊は「国民の大義」や「自由の大義」のために戦つた「国民軍」と位置づけられ、ウェルキングトリクスその人も「ガリア独立」のためにローマの侵略者と戦つた国民的英雄として描かれた。⁽¹⁷⁾言うまでもなく、実際のガリア人は近代的な国民意識や国民観念とは無縁であり、ナショナル・アイデンティティではなくて、エスニック・アイデンティティの次元にとどまつていた。

ナポレオン三世も、「国民の過去」を考古学的民族誌的に再構成する」とおおいなる関心を抱いていた。彼は、民衆の支持を得るためにも、フランス国民の祖先がフランク族ではなくて、ガリア人ないしケルト人だという考えを公認し称えた。第二帝政が始まつた一八五〇年代には、ガリアの要塞アレシアの場所をめぐつて議論が戦わされていた。アレシアはディジョン近郊のアリーズ＝サント＝レーヌ (Alise-Sainte-Reine) 村なのか、あるいはブザンソン南方二五キロにあるアレーズ (Alaise) 村なのか。アレーズ村説の支持者には、古文書学院教授のジュール・



ウェルキンゲトリクス

出典：Désiré Blanchet, *Histoire nationale et notions sommaires d'histoire générale*, première année, Paris, 1888, p. 24.

このように、一九世紀半ばにガリア兵のイメージが定着する。一八〇四年にアレシアのオグゾワ山で金貨が発見され、一八六〇年代の発掘では、ウェルキンゲトリクスの名が刻印された二枚の青銅コインと無銘の肖像金貨が見つかったことが、ガリア兵のイメージの定着に与っていた。こうして長髪で髭をはやしたガリア兵の像が造られ、ミレーのウェルキンゲトリクス像となり、

キシユラもいた。¹⁸⁾ 一八五八年七月に、ナポレオン三世はガリア地誌委員会を設置し、学問的に決着をつけるためにも、一八六一年にアレシア（アリズ村）を、翌年にはゲルゴヴィアの発掘に私財を投じて、考古学上の史料を収集させた。六一年六月には発掘中のアリズ村を訪れてもらっている。また、一八六七年には国立古代博物館をサン・ジエルマン・アン・レールの城にオープンさせている。皇帝が、彫刻家エメ・ミレーにウェルキンゲトリクス像の制作を依頼して、私費で購入したのも同様の考え方によるだろう。ミレーは、皇帝の風貌をモデルにしてガリアの指導者を造形しており、その巨大な銅像は、一八六五年八月にディジヨン近郊のアレシアに建立された。高さ七メートルの台座の上に、背をかぶらず、地面に突き刺した剣に両手をもたせかけた六・六メートルの立像が据えられた（図参照）。皇帝は台座にウェルキンゲトリクスの言葉を刻ませている。「団結したガリアから生まれるのは同じ心を持つた活動的な民族だけであり、そのガリアは世界に立ち向かうだらう」¹⁹⁾。

このイメージが流布していく。民衆の心性にまでこの像が浸透するには、一九一〇年に発売されるタバコ「ゴローヴーズ」を待たねばならない。⁽²⁰⁾

こうして、アレシアは「国民史の起点」の地位を獲得し、ガリア・ブームが生まれる。一八六四年にアカデミー・フランセーズがガリアの英雄に関する詩の賞を設け、一八六八年七月にアンリ・ド・ペーヌとエドモン・タルベリデ・サブロンが新聞『ル・ゴーロワ』（一万二〇〇〇部）を発刊し、一八六〇年代にはウエルキンゲトリクスを画題にした絵や石膏像がサロンに出展された。エールマンの絵やバルトルディの彫像などが代表的なものであり、クールベも「ウエルキンゲトリクスの煙の木」（一八六四）という絵を描いている。しかしナポレオン三世が、『ユリウス・カエサルの歴史』（一八六五）の著者であることも忘れないでおこう。アレシア発掘の動機の一つは、カエサル伝の執筆にあつたと言つてよいだろう。彼は、ウエルキンゲトリクスを称えつつも、ローマによる植民地化の恩恵をも主張し、「われわれの文明はローマ軍の勝利のおかげである」と記す人物でもあつた。さらに、一八六八年八月一日デクレによってパリ一四区に新しい街路（アレシア通りとトルビアック通り）が誕生したが、ガリアの独立を象徴するアレシア通りは、フランク国王クロヴィスの戦勝地から取られたトルビアック通りと結ばれていた。ナポレオン三世の政治的リアリズムであろうか。しかし、「玉座と祭壇の同盟」が称えるクロヴィスは第三共和政の成立とともに影が薄くなり、それに代わって、詩や小説や戯曲のジャンルにおいてもウエルキンゲトリクス賛歌が大量に制作されるようになる。⁽²¹⁾

一八七〇年の敗北を体験したフランス人にとって、ガリアの英雄は何よりも「敗れたフランスの誇り」を表象し、それだけに共感を集めやすかつた。一八七一年に、ジャンヌ・ダルクとウエルキンゲトリクスが手を握る立像「民族独立の殉教者たち」（エミール・シャトルース作）がサロンに出展され、一八七三年一一月一〇日県令で、パ

リ一四区にヴェルサンジエトリクス通りとジエルゴヴィ通りが生まれたところにも、そうした心性を窺うことができる。第三共和政期のフェリーリーの学校が、クロヴィスやフランク族に代えてウェルキンゲトリクスとガリア人を登場させたが、一八八〇年頃までの初等教科書では、ガリア人はフランス史の外に追いやりられており、フランク族によるガリア征服とクロヴィスの洗礼から国史は始まっていた。石工出身の政治家マルタン・ナドが、自分の家系は「偉大でたくましいガリア族に連なり、……ガリア人たちは常に共和政を欲していた」と一八九五年に記すには、こうした歴史教育の変化があった。また、ナドがガリア人の民衆性を強調したところに、フランク人を貴族と同一視する階級的視点を垣間見ることができる。⁽²²⁾

「フランク人＝貴族、ガリア人＝民衆」という図式は、オーギュスタン・ティエリの『メロヴィング王朝史話』（一八四〇）所収の「フランス史考」（未訳）で出された二階級モデルであり、この図式が、普仏戦争の敗北後の共和政において政治的にも利用できる表象となつた。ガリア人は農奴と農民の祖先であり、ガリアを侵略したフランク人は貴族の祖先であった。フランク人はプロイセン人と同一視され、対獨復讐の文脈のなかで、いつそうガリア蠶負が作り出されていく。またローマ人という表象は、ヴァチカンの介入を拒否する政教分離の戦いのなかで失墜していった。しかも紀元前のウェルキンゲトリクスは、教会と共和国を対立させた争いとも無縁であり、まさに彼はコンセンサスを得られる人物、国民統合の象徴であった。

こうして「英雄の国民化」が進み、ウェルキンゲトリクスが「最初の国民的英雄」となるや、「フランス・君主政・カトリック教会」というかつての聖なる三位一体は、「ガリア・国民・共和政」という世俗的で民主的な三位一体へと変化した。ウェルキンゲトリクスは、国の統一のために努力した「最初のフランス人」と称された。共和派が、王政やカトリック教会の伝統とは無縁なガリアの英雄を称えたのに対し、一八八〇年代にカトリックはク

クロヴィスを称揚し、一八九六年に行われたクロヴィスの受洗一四〇〇年祭がそれに弾みをつけた。カトリックの教科書出版社マムは、『クロヴィス——フランスの振りかご』（一八九八）という伝記を出して「玉座と祭壇の同盟」を祝った。この本のなかで、「フランス族の息子であるフランス人よ、王妃クロチルドとクロヴィスのように、キリスト者たれ、偉大あれ」と呼びかけられた。ここにも二つのフランスが顔を覗かせているが、一八九〇年以来のカトリックの共和政への参加運動によって、ウェルキンゲトリクスに対して折衷的な見解が出されるようになる。ヴエルサイユにあるカトリック校の神父たちは、生徒のために書いた「ウェルキンゲトリクス」の脚本のなかで、「われわれは祖国という同じ関心しか持たない」と述べて、ウェルキンゲトリクス崇拜と愛国心を鼓舞するよう求め、「最後のガリア人の墓はキリスト教の振りかごであった」と記していた。つまり、ウェルキンゲトリクスは、クロヴィスの到来を用意する使命を帯びていたと主張された。「ウェルキンゲトリクスは、わが民族のキリストだ」という主張も現れたほどである。⁽²³⁾ こうしてガリアの時代は、カトリックにとっていわばフランス史の「旧約聖書」の時代となつたのである。

ただし、ウェルキンゲトリクスを賞賛し、カエサルを非難するという単純な問題ではなかつた。多くの教科書は、ガリア人の生活と現在のフランスとを比較しつつ、「未開と文明」の一項図式で描き、そのコロラリーとしてフランスの植民地主義を「文明化の使命」によつて正当化していた。

ローマ人のおかげでガリアが文明の段階に達したという考えは、すでにヴォルテールにも見られた。ヴォルテールは、「未開の」ガリアは、「開明的な民族^{ナショナル}に服従する必要があつた」とか、「ガリア人はローマ人に敗れて幸せであつた」と記した。ギゾーは「ローマ帝国の征服による專制的支配は、必要かつ有益な進歩であつた」と語り、ラマルチーヌは、「カエサルの戦争に感謝せねばならない。それは、一つの民族^{ブル}を隸属させたが、人間の精神を解放

したのだ」と述べ、一九世紀ラルース事典の項目「ウエルキンゲトリクス」のなかでも、ローマの「征服は武力によるだけなく、文明による征服でもあった」と評価された。こうした見解は、歴史家フュステル・ド・クーランジュなどのロマニストによって強力に主張され、コレージュ・ド・フランスのラテン文学教授のガストン・ボワシエも、「私にはカエサルに向かって怒ることはできないし、祖先の敗北はそれほど嘆かねばならないものとは思われない」と述べていた。ナポレオン三世にも見られた、ローマの勝利がガリアにとって有益であったという主張は、第三共和政期に強まるのである。エルネスト・ラヴィスも一八八八年に出した書物のなかで、今日、ウエルキンゲトリクスの彫像造りに専念している者もいるが、ガリア人のウエルキンゲトリクスとわれわれとの間には、ゲルマン人アリオウイストゥスとドイツ人ほども関係がなく、ウエルキンゲトリクスの敗北以後、ガリアはローマ人に征服され、ローマから言葉や制度や習俗を学んだと記していた。アクシオン・フランセーズ系の歴史家ジャック・バントヴィルも、ウエルキンゲトリクスが勝利していたなら、「それは不幸なことであった」と述べている。⁽²⁴⁾

このように、ガリア神話がピーケに達したのは第三共和政である。それには、普仏戦争の敗北が大きく作用している。一八八一年に、「最近のかつてない不幸な出来事の後、われわれは、ガリアの方へと自ら進んで関心を向けた。ガリア人はフランス国民にとって、一種の崇拜の的となり、国民的名誉の守護神とさえなった」と述べられていた。⁽²⁵⁾ カエサルはモルトケと比較され、アレシアの戦いはスダンの敗戦と同一視された。「野蛮な」ゲルマン・ドイツとの対比で、フランスの独自性やフランスのアイデンティティを探求する必要に迫られ、国民の起源をフランク以前の時代に求めるムードが高まつたのである。

とはいえ、ウェルキンゲトリクスやガリア伝説が力を持ったのは初等教育であり、ラテン語を重視する中等教育では、カエサルやタキトゥスやプルタークの注釈が授業の中心であり続け、高等教育でもガリア人の徳や制度につ

いては懷疑的であつた。⁽²⁶⁾ マレの中等第六学級（一一～一二歳）用の古代史の教科書は、古典古代に紙幅が費やされ、カエサルによる「ガリア征服」の一齣としてガリアが登場するだけであり、「カエサルの勝因」を戦術や規律や科学に求めていた。ウエルキンゲトリクスは、「独立の英雄」とか「祖国ガリアという意識を持つた熱烈な愛国者」として描かれるが、その彼は、「勝つためには優柔不斷な連中に恐怖を与えて従わせた」人物でもあつた。このように中等の教科書では、ウエルキンゲトリクスの殘忍さも指摘された。セニヨボスのテキストでは、「ウエルキンゲトリクスは、反逆者を生きたまま焼き殺し、裏切り者の耳をそぎ落とし、目をくり抜くことで規律を打ち立てた」とか、ガリア人は「文学、芸術、科学といった文明の本質に無知」であり、「ローマ人は諸民族を服従させつ多大な恩恵を与えた」と記されたのである。⁽²⁷⁾

以上のようにガリアに対する評価の推移や、教育課程による力点の相違を念頭に置いた上で、第三共和政期の初等用歴史教科書を読んでみよう。

三 ラヴィスとガリアの英雄

真っ先に取りあげるのは、エルネスト・ラヴィスの教科書である。別稿でも論じたように、ラヴィスは教科書執筆者として著名な歴史家であり、「国民の教師」を目指した彼の教科書は「共和国の福音書」とまで言われた。⁽²⁸⁾ まず、小学校低学年向けの『新準備級フランス史』（第九四版、一九〇二）の「ウエルキンゲトリクス」の物語から、ガリアの英雄の描写を見ておこう。

オーヴェルニュに生まれたウエルキンゲトリクスは、勇敢で威厳に満ちていたがゆえにガリア人の首領になつた。カエサルに雄々しく抵抗したが、アレシアでローマ軍に包囲されて餓死者が出るにいたり、ウエルキンゲトリクス

は、兵士たちを救うために、美しい鎧をまとい駿馬に跨って町を出てカエサルに降伏し、その足下に武器を投げ出し虜囚の身となつた。カエサルは、ガリア人の首領に鎖をつけてローマまで連れて行き、六年間獄に繋いだあげく、「ガリアを守つた英雄を滅ぼそうとして残虐行為に及んだ」(p.5)。ここでは、ウエルキンゲトリクスの指導者としての資質と勇敢で犠牲的な精神が称えられている。挿絵「カエサルに降伏したウエルキンゲトリクス」は、馬に跨つて腕を組んで毅然とした態度でカエサルと対面している場面を描き、惨めな捕虜のイメージからはほど遠い構図である。設問には、ウエルキンゲトリクスの犠牲的行為について考えさせる問が置かれた。

本文では、紀元前四世紀以降のガリアの風土や景観、ガリア人の宗教や死生觀が述べられた。ガリアは、地理的には今日のフランスより広いが、未開で森におおわれ、狼や熊や野牛が放浪していた。森に隠れるようにして村があり、ガリア人は窓もない粗末な木造の家に住んでいた。ガリア人は、ドルイドと呼ばれる祭司のもとに自然崇拜や靈魂の不滅を信仰する異教徒であった。彼らはしばしば争い合い、時には外国を征服したこと也有つた。紀元前三九〇年にはローマを脅かすほどの勢いであった。しかしローマは帝都となり、ローマ人はガリアを攻撃してきた。こうして「有名なローマの将軍カエサルは紀元前五八～五〇年の間に全ガリアを征服した。わが国を勇敢に守つたウェルキンゲトリクスは、征服者に降伏をよぎなくされた。四〇〇年以上の間、ガリアはローマ人に服従してきた。まさにこの時、キリスト教の福音がガリア人に説かれた。キリスト教の国教化とともにガリアにもキリスト教が打ち立てられた(pp.3-6)。第九四版ではローマ文明の恩恵については触れられていないが、「ガリアのキリスト教への改宗」に紙幅が費やされており、クロヴィス以前のキリスト教化の強調は、王党的歴史叙述に対する批判になつてゐる。

ラヴィスの教科書をさらに三冊取りあげよう。九〇一歳の生徒用の『中級フランス史I』(一九〇四、六六版)

と『中級フランス史』（一九二一、一七版）、それに一一〇一二歳の生徒用の『上級フランス史II』（一八九七、五四版）の二冊である。⁽³⁰⁾

ラヴィス中級（一九〇四）では、一四八三年以前の時代は非常に簡略化されており、ウエルキンゲトリクスも一行で片づけられ、挿絵もミレーの立像が小さく載せられただけであった。フランス史の「最初の英雄」という位置づけに、地理的アイデンティティと歴史的アイデンティティが結びつけられている様を窺うことができる。それでも、ガリア人は未開で分裂し、勇敢だが規律を欠いており、ローマの征服によって文明の恩恵を受けたことが記される。第一編のまとめでは「祖国」が強調された。分裂して争い合っていた「ガリアは祖国ではない。なぜなら、祖国とはすべての子どもたちが互いに愛し合うはずの国だから」とゴチック体で強調された（pp. 5-7, 22-23）。ドレフュス事件の直後だけに、統一を重視するラヴィスにとって、国内の分裂や抗争は祖国に対する大罪であった。

中級一九二一年版では、ウエルキンゲトリクスに一頁が当たられたが挿絵はない。ガリアの地図が載せられ、今 のフランスより広かつたことが説明された。フランスの時間的連續性を伝えると同時に、領域にも目配りさせる構成になっている。ラヴィスは冒頭で、一〇〇〇年前のガリア人たちは一〇〇ほどの部族に別れて、しばしば争い合っていたことを述べて、「ガリアは祖国ではない」と一九〇四年版と同じ言葉を書き記した。ガリア人は勇敢であるが、命令されるのを好まず、それゆえしばしば戦いに敗れた。負け戦と分かれるや、すぐに戦意を喪失するという欠点も持っていた。「兵士は、勇敢であるだけでは不十分であり、指導者の命令に服さねばならない」と注釈がなされた。そして、ローマ軍の征服に直面して、ウエルキンゲトリクスは「外国人に自國が占領されるのは恥ずべき」とだとガリア人に理解させた」とを述べる。知将カエサルにアレシアで攻撃され、「ウエルキンゲトリクスは、敵に対して自國を守ったがゆえに死んだ。……まあ兵士の義務を果たすことによって名譽を救うことはできる。フラン

ンスのすべての子どもたちは、ウェルキングトリクスを記憶にとどめ愛すべきである」（全文イタリック）と述べられた。第一次大戦で強まつたナショナリズムの余韻が感じ取られる文章である。ローマの支配については、外国人に服従することを「最大の不幸」としつつも、ローマ人から建築、数学、ラテン語、キリスト教など多くのことを学んだことが記された。この单元のまとめでは、「国民の本質はガリア人のままである。ガリア人はわが祖先である」と断定された(pp. 5, 8-13, 26)。

ラヴィス上級（一八九七）でも、未開のガリアとローマの文明という枠組みで、短い本文と物語が置かれた。勇敢なウェルキングトリクスと不寛容なカエサルという構図のもとに、アレシアの戦いが叙述されたが挿絵はない。ガリア人は勇敢であつたが分裂しており、カエサルに敗れた。そのとき若き指導者ウェルキングトリクスがガリア軍を統率し、「わが国を守るために勇猛果敢に戦つた。それゆえフランスの子どもたちは、彼の思い出を慈しむべきだ」とラヴィスは記す(pp. 31, 36)。祖国の防衛者という位置づけである。

以上のようなラヴィスの教科書は、共和派の教科書の原型となつた。それでは、ラヴィスの教科書を原型として他の教科書と比較しよう。

四 教科書のなかのウェルキングトリクス

本稿で取りあげた二冊の教科書の内訳は、一八七〇年代に執筆されたものが四冊、第一次教科書ブームの一八八〇年代に執筆されたものが八冊、第二次教科書ブームの世紀転換期に執筆されたものが八冊、その他二冊である。本節で取りあげる教科書は、ラヴィスより共和主義の主張が鮮明なゴーチエとデシャンの初級と中級、稳健共和派のクロード・オジエとマキシム・プチの準備級、初等教育の名誉視学総監セニエットの初級、リセ・シャルルマー

ニュの元教授デジレ・ブランシェの中級と『上級世界史』、リセ・サン・ルイの歴史教授アンドレ・グレゴワールの上級、リセ・デカルトの歴史教授ピジョノーの『フランス小史』、元ポワチエ大学区長マジャンとリセ・フォンターヌの歴史教授グレゴワールの『フランス史』、師範学校教授デュクドレイの『基礎フランス史』、および中等教育用の教科書である⁽³¹⁾。これら公立学校で使用されたもの以外に、カトリックの修道士や教授たちが執筆して私立学校で用いられた教科書や年表の記述からも特色を窺うことができる。名誉想念学総監で歴史教授のフェリックス・アンサールの『フランス小史』、リセ・ルイ・グラン教授ギュスター・ユボーの上級、ヴォーチエ・ダリュヴァンの世界史などがその例である⁽³²⁾。それでは、これらの教科書を課程別・出版年順に読んでみよう。

まず一八七〇年代に出版された教科書を検討しよう。ピジョノーは、独立期ガリアの地誌やガリア人の容貌、信仰などに触れた後で、ウェルキンゲトリクスとアレシアの戦いに三頁を当てたが、英雄譚にはしていない。ウェルキンゲトリクスの勇敢さを記し、戦闘の経緯が活写されたが、挿絵はない。ラヴィス本と大きく異なるのは、カーサルがガリアの指導者を引き渡すように求め、徹底抗戦派のウェルキンゲトリクスが自】犠牲的行為で捕虜になつた』という点である。「自由を失はしたが、ガリアは勝者から文明を受け取つた」という点はラヴィスと同じだ(p. 10-12)。マジヤン・グレゴワール本は、「最初の王クロヴィス」から第一章が始まり、ガリアの時代は序章で簡単に扱われた。しかも地誌に多くが割かれ、ガリアはローマ文明の均霑に与つた」とが語られた。「ガリア独立の擁護者」ウェルキンゲトリクスについては、「英雄的行為と同時に「民族の自由を守るために武装しない者には手首の切断」などの仕打ちが加えられた」とも述べられた(p. XII)。挿絵もなく、ガリアの時代の扱いが軽いのは、一八七〇年代の出版だからであろうか。

著名な副読本『一人の子どものフランス巡歴』は、「われらが祖先ガリア人」と明示し、「わが祖国ガリアでその

時代に起きた話は感動的だ」として、ウェルキンゲトリクスの戦いを物語る。ウェルキンゲトリクスを、カエサルと勇敢に戦い祖国からローマ軍を追い出そうと決意した人物として描く点で他の教科書と変わりがないが、アレシアの包囲戦の説明のなかで、普仏戦争時にパリがプロイセン軍に包囲され、一人の子どもの故郷ローヌの町が侵略されたことに触れて、過去と現在を往還することで対独復讐心を維持しようという点に特徴を窺うことができる。また、カエサルがウェルキンゲトリクスの引き渡しを求めていたことも記された。挿絵にはミレーの立像が使われている（pp. 134-138）。

次に初級教科書を覗いてみよう。セニエットは、物語のなかで「勇敢な戦士」ウェルキンゲトリクスに言及した。アレシアという地名は出ていないが、ローマ軍に包囲されて食糧が底をつき、餓死者を出すのを避けるために単独でカエサルに降伏し殺されたことが記された。挿絵は一枚あり、一枚はミレーの立像、他の一枚はカエサルのもとに駆けつけた馬上のウェルキンゲトリクスであり、勝者と敗者ではなくて対等の立場を感じさせる構図である（pp. 9, 13）。オジェとブチの準備級には、本文でガリア人が互いに争いあい、敗れた部族がローマ軍に救援を求めたことがまず述べられた。ついで、ウェルキンゲトリクスは勇敢に戦つたが、戦争技術でもローマ軍が勝つていたことも触れられた。「読み物」で語られたアレシアの戦いについても、情に厚いウェルキンゲトリクスと非情なカエサルの仕打ちが対照的に描かれるが、抑制のきいた文章で綴られた。挿絵は一枚あり、カエサルのもとへ降伏しに行つたウェルキンゲトリクスの到着場面とアレシアの戦いの戦闘シーンが描かれた。とくに前者の挿絵では、馬にまたがり堂々とした体躯のウェルキンゲトリクスがカエサルと睨み合っている場面が描かれた（pp. 5-7）。

ゴーチエとデシャンの初級を見てみよう。ラヴィスの準備級より戦いが詳しい。ガリア人が好戦的な民族であつたことを指摘した上で、ウェルキンゲトリクスに二頁があてられた。クレルモン・フェラン近郊ゲルゴウイアに生

まれたウエルキンゲトリクスは、祖国の独立のためにカエサルと英雄的に戦った。しかし、ガリア人は絶えず内輪もめをして団結を欠いていたので敗れた。「力の素は団結だ」と注釈された。ウエルキンゲトリクスの呼びかけに応えて、全ガリア軍がローマ軍と戦い、ゲルゴウイアでは勝利したがアレシアでローマ軍に包囲されて敗れた。ウエルキンゲトリクスは、ローマでの六年におよぶ虜囚生活の後に首を刎ねられた。「ガリアの英雄ウエルキンゲトリクス」という読み物が、ラヴィスの物語と同様、アレシアの戦いにおける勇敢な英雄の姿を描く。自己犠牲的な行為が徒労に終わり、ローマで殺害されたことを述べて、著者たちは「わが史上初の英雄は非業の死をとげた」と結んだ。挿絵は、ミレーの立像と馬から降りて腕組みをし、カエサルと向き合う威厳に満ちたウエルキンゲトリクスが描かれている。設問では、なぜ敗れたウエルキンゲトリクスは逃げ隠れしないでカエサルに降伏したのか、勝者と敗者についてどう思うか、なぜ君はウエルキンゲトリクスが好きなのか、なぜ君はカエサルを好まないのか、などが尋ねられた(pp. 2, 4-5)。ウエルキンゲトリクスの道徳的優位さの解答を期待しており、愛国的な起源神話にふさわしい質問である。

次に中級の教科書である。デュクドレイ中級は他の教科書より詳しいが挿絵はない。勇敢だが、ガリア人はローマ人より科学的に劣り、命令や規律なしに戦い、互いに嫉妬しあって部族の領地の防衛しか考えなかつたという欠点がまず指摘された。それゆえ「祖国ガリア」はいまだ存在せず、「祖国の感情」が覚醒したときはすでに遅かつた。物語でアレシアの戦いが詳述され、「^{イブ}国民は、団結なくして独立を維持することはできない。科学と規律によってのみ戦争に勝つことができる」と総括され、「独立戦争の英雄」の「ウエルキンゲトリクスは、献身と愛国、心の偉大な模範を示した」と締めくられた。⁽³³⁾ (pp. 4-7)。

プランシェ中級は、ガリアの地理やガリア人の習俗や遠征に触れた後で、二頁をウエルキンゲトリクスに割いた。

その評価は「ガリアの英雄的な指導者ウエルキンゲトリクスは、ガリアの独立を守ろうとした」に由来するだろう。勇敢なガリア人は規律に欠け、指導者に従わず、反目しあい、互いに妬みあつた」とも指摘された。「アレシアの包囲」が物語と読み物の両方で取りあげられている。ブランシェの淡々とした描写を補ったのが、ギゾーの包囲戦の引用である。ブランシェは、「恩を感じたフランスがガリアの守護者の立像を建立した」とにも触れ、ミレーの立像を掲載した。アレシアの敗北以後、「ガリアはローマ人によって賢明に統治された」、「ガリアは独立を失つた代わりに文明を受けとつた」というのが著者の評価である（pp. 5-12）。

ゴーチエとデシャンの中級はどうだろう。地理的には現在のフランスより広大であった未開のガリアは、ローマ人によって文明化したことが述べられた。中級も「われらが祖先ガリア人」が戦士民族であったことに触れて、このテーマに約一頁をあてて述べる。本文のなかで、「愛国的な首領ウエルキンゲトリクスの声に呼応してガリア人は一斉蜂起した」が、アレシアの戦いで敗れ、ウエルキンゲトリクスは殺害されたことが記された。「読み物」では、カエサルよりも「偉大なウェルキンゲトリクス」について、同胞の命を守るために自ら犠牲となり、「祖国の独立を守るために戦つた」「偉大な祖先」について語るのである。設問には、英雄の役割やローマ支配の帰結について考えさせる問い合わせが置かれた。挿絵は、初級と同様の対面図が収められている（pp. 2-3）。

グレゴワール上級は、「独立期ガリア」の項目で淡淡と叙述したにすぎず、挿絵もない。「分裂していたがゆえに弱体で敗れたガリアが、団結の必要性を理解したのは遅かった。……ウエルキンゲトリクスはアレシアの砦に閉じこめられ、死にもの狂いの抵抗の後、降伏せざるをえなかつた」。「ウエルキンゲトリクスの努力と英雄的なアレシアの防衛戦にもかかわらず、ガリアは八年で征服された」（pp. 79, 99）。ブランシェ『上級世界史』は、カエサルが、抗争し合っているガリア諸部族を各個撃破して征服していく様を述べ、ガリアの独立堅持と愛国心に由来す

る外国への憎悪から決起したウエルキンゲトリクスの伝記を二頁挿入していた。内容的にはラヴィスと重なっているが、戦争中は無慈悲なカエサルが戦勝後は寛大になったことが記された。挿絵はミレーの立像である(⁽³⁴⁾ pp. 110-114)。

最後にカトリック系の教科書を読んでみよう。四冊ともに挿絵はなく、ユボーを除いてガリアの扱いは軽い。キリスト教修道士の年表は、「カエサルのガリア征服」の項で説明した。ウエルキンゲトリクスの声に応えて全ガリアは決起し、最初はカエサル軍を撃破したがマコンの近くで敗北を喫した。そしてアレシアで包囲され、部下たちを助けるために、ウエルキンゲトリクスは単身カエサルのもとに赴いて囚われの身となつた。しかしカエサルは、ウエルキンゲトリクスを鎖につないでローマまで引き連れ、戦利品として利用したあげくに殺害した。評価的な文言もなく、淡々とした記述であり、クロヴィスの戦争や改宗のエピソードが詳述されたのと対照的である(pp. 12, 17-18)。国王列伝のようなアンサールの本は、ウエルキンゲトリクスには触れる」となく、カエサルとの「八年間の激しい抵抗の後、ガリアはローマの属州になつた」と記したのみである(p. 6)。

テキストの半分近い二〇〇頁を紀元前の聖史に費やしているダリュヴァンの世界史は、ウエルキンゲトリクスはもとよりカエサルのガリア遠征についてもほとんど触れていない(pp. 207-208)。ユボーは、「カエサルによるガリア征服」の項目でウエルキンゲトリクスやゲルゴヴィアとアレシアの戦いを詳述した。ウエルキンゲトリクスは、独立への愛と外国への憎しみという共通の感情のなかでガリア人に団結を訴えたが、カエサルに敗れた。カエサルとの対面の場面では、誇り高い態度のウエルキンゲトリクスと罵詈雑言を浴びせるカエサルが対照的に描かれた。ウエルキンゲトリクスの獄死に触れた後で、敗者を哀れみ不幸な人を敬うようにという使徒ペテロとパウロの教えは、まだ發せられていなかつたと述べたところにカトリック色を窺うことができる。それでも「ローマは、ガリア

人に独立と引き替えに文明の恩恵をもたらした」と結論された(pp. 6-10)。ユボーの叙述は、祖国崇拜や文明化を説く点で共和派の教科書とほとんど差がない。

五 英雄とナル・アイデンティティ

国民的な英雄はなにも勝者に限らない。ジャンヌ・ダルクに典型的なように、敗者や殉教者も英雄になりうるが、敗北の前に勝利があれば劇的効果はさらに高まる。そうした敗北は、勝利よりも「想像の共同体」を構築しやすいからである。本稿で取りあげたウェルキンゲトリクスも、そのような英雄であり、ゲルゴヴィアの戦いに勝利した彼は、アレシアで敗北し、カエサルによって殺害され殉教者となつた。敗者ではあれ、侵略者に対して抵抗し、祖国に殉じた国民統一の象徴、高潔で栄誉に包まれた人物というウェルキンゲトリクス像が、教科書などを通して広められた。しかも「対独復讐」が政治課題であつた前期第三共和政においては、ローマ軍と戦うガリア人はドイツ帝国と戦うフランスと同一視され、ナル・アイデンティティの構築に役立てられたのである。

とはいっても、ガリアの重視は両義的であった。第三共和政期の歴史教科書の多くは、フランス史の始原をガリアに求め、ウェルキンゲトリクスを、独立の擁護者、祖国の化身、フランスの創始者として描くが、他方でガリアは未開の地であり、敗北が幸福な結果をもたらしたと結論された。こうした主張は、人文主義教育の牙城である中等教育ではかなり強かつた。それだけに、ガリアは独自の文化を持っていて主張する論者たちが、一八八二年に、中等学校の「教授たちは、わが父祖の民族独立の破壊者」たる「カエサルを称揚し賛美することを目指している」と非難したのである。修道会系の教科書にも、カエサルの残忍さに触れ、「わが父祖も自分たちの文明を持っていた」のに、突然その発達が止められたのだと記すものもあった。³⁵⁾こうしたガリア・ナショナリズムは、形を変えつつも

今まで続き、ウェルкиングトリクスの英雄視と、ガリアに「フランスのアイデンティティ」を求める主張をあと押しすることになる。⁽³⁶⁾

ともあれ、第三共和政期の歴史教育の効果を、一九四八年と一九八〇年に同じ質問項目で行われた歴史アンケートに窺うことができる。アンケートの分析によると、ウェルкиングトリクスは異論のない英雄にランクされており、「フランス史の英雄」として不動の地位を確立していた。ガリアの英雄が支持されたのは、第二次大戦直後はレジスタンスの影響下で、ドゴールがウェルкиングトリクスを「わが種族の最初の抵抗者」と賞賛し、一九四七年の道德の初等教科書のなかでも「レジスタンスの最初の英雄」と位置づけられていたこと、一九八〇年には『アステリクス』の人気によるところが大きいだろう。第三共和政が誕生して一世紀の間に、ガリアの英雄はフランス社会にしっかりと根づいたのである。こうした趨勢は、二〇〇四年に出版された『フランス史を作った一〇〇人』にも表れている。二人の著者は、一〇〇人でフランス史のパノラマを提示することは「賭に近い行為」であることを認めつつも、国民の記憶作りに寄与した人物の最初にウェルкиングトリクスを取りあげた。その理由として、古代ガリアという、いまだフランスが存在していない時代の人物が、一九世紀以降に重大な役割を演じたことを挙げている。⁽³⁷⁾

このような人物フランス史は、英雄崇拜や英雄史観に荷担する危険性もあるだろう。時あたかもフランスは、一九八七年にユーラー・カペーの即位ミレニアムを祝い、一九八九にはフランス革命二〇〇周年を祝つた。また一九九四年に国立古代博物館で、一九世紀以降の発掘調査の「最初の総決算」として「ウェルкиングトリクスとアレシア」展が開かれ、一九九六年には、クロヴィスの受洗一五〇〇年祭があつた。フランスは、まさに「コメモラシオンの時代」に突入したかの感がある。ちょうどそれは、フランスに文化ナショナリズムが強まる時期と符合している。しかし今日、多文化主義が浸透するなかで、フランス生まれのアフリカ人の世代にフランス史や黒人の歴史を

いかに教えるのかを考察した書物、『歴史教育と文化的多様性——わが祖先はガリア人にあらざる者——⁽³⁹⁾』が出版されたといふ。11世紀のガリア人とフランクの新しい関係が示されたり。

- (1) 『朝日新聞』110011年1月11日、11000年1月1日、1100五年六月11日。
- (2) François Furet, "De l'histoire-récit à l'histoire-problème", *Diogène*, no. 89, 1975, p. 115. ハニカミ、起源物語の記念碑が「国民民族の未来を保障する」記念碑。
- (3) 小畠田泰直『邪馬台国』日本人平凡社新書、11001年。小熊英一『單民族神話の起源』新疆社、一九九五年。
- (4) Suzanne Citron, *Le mythe national, l'histoire de France en question*, Paris, 1987, p. 9. Cf., David A. Bell, *The Cult of the Nation in France 1680-1800*, Cambridge, 2001; Bernard Cottret dir., *Du patriotisme aux nationalismes 1700-1848*, Paris, 2002.
- (5) 以上 André Simon, *Vérité-gentilice et l'idéologie française*, Paris, 1989, pp. 28, 97; Anne-Marie Thiesse, *La création des identités nationales*, Paris, 1999, p. 131. 前川貞次郎『フランク革命史研究』(鶴文社)一九五六年、七11頁。
- (6) Bernard Guenée, "Les Grandes chroniques de France", in Pierre Nora éd., *Les lieux de mémoire*, II La Nation, t. 1, Paris, 1986, p. 211.
- (7) Philippe Contamine, "Introduction", in Yves-Marie Bercé et Philippe Contamine éds., *Histoires de France, Historiens de la France*, Paris, 1994, p. 11.
- (8) 以上 Simon, *op. cit.*, pp. 27-28, 37-40; Thiesse, *op. cit.*, pp. 11-12.
- (9) クランベ・ボーテー(上垣翻訳)「フランク人のガリア人」シナール・ハラ編(谷川稔翻訳)『中世纪の場』岩波書店、11001年、1110頁。
- (10) マルクス(城塹翻訳)『く一ゲル法新字批判序説』岩波文庫、一九七五年版、九六頁。
- (11) オーギュストン・ル・ムリガ『殉教者』を読んだ「感激の一瞬が、おもらく私の天職を決めた上での決定的な一瞬だった」と述べ、「我が国の歴史の根本やあり定式であった」王位や君主政体の歴史を越えたシャトー・ブリヤンの歴

史叙述を称えている。オーギュスタン・ティエリ（小島輝止訳）『メロヴィング王朝史話』（上）岩波文庫、一九九二年、一三一~五頁。

- (12) Michel Pastoureau, "Le coq gaulois", in Pierre Nora éd., *Les lieux de mémoire*, III Les Frances, t. 3, Paris, 1992, pp. 520-526; Paul-Marie Duval, *Pourquoi « Nos ancêtres les Gaulois »*, Paris, 1982, pp. 12-13.

(13) カルモネー(近三金次訳)『ガロの歴史』岩波文庫'一九八八年版'一九七八年頃。

(14) ダントン Corrado Vivanti, "Les recherches de la France d'Étienne Pasquier", in Pierre Nora éd., *Les lieux de mémoire*, II La Nation, t. 1, Paris, 1986, p. 226; Paul Bouteiller, "Étienne Pasquier et l'histoire de France au XVI^e siècle", in Bercé et Contamine éds., *op. cit.*; Mona Ozouf, *L'école de la France*, Paris, 1984, pp. 344-347; Danièle et Yves Roman, *La Gaule et ses mythes historiques*, Paris, 1999, pp. 169-170; Edmond Marc Lipiansky, *L'identité française*, La Garenne-Colombes, 1991, pp. 170-171. シュターベキュー(根岸国新訳)『法の精神』東洋書店新社'一九七四年'一〇八〇年頃。八月四日。

(15) ダントン Simon, *op. cit.*, pp. 21, 24, 29, 41-42, 49; Christian Amalvi, *De l'art et la manière d'accueillir les héros de l'histoire de France*, Paris, 1988, p. 75; Olivier Buchsenschutz et Alain Schnapp, "Alesia", in Pierre Nora éd., *Les lieux de mémoire*, III Les Frances, t. 3, Paris, 1992, pp. 305-306; Christian Croisille, "Michelet et les Gaulois ou les séductions de la patrie celtique", in Paul Viallaneix et Jean Ehrard dir., *Nos ancêtres les Gaulois*, Clermont-Ferrand, 1982, p. 213; Alice Gérard, "La vision de la défaite gauloise dans l'enseignement secondaire", in *Ibid.*, p. 358.

(16) 云上の事項を Rémi Mallet, "Henri Martin et les Gaulois", in Viallaneix et Ehrard dir., *op. cit.*, p. 235; Citron, *op. cit.*, p. 148. 『アレシア』翻訳原文、七八一七八二〇〇年頃。

(17) Claudine Lacoste, "Les Gaulois d'Amédée Thierry", in Viallaneix et Ehrard dir., *op. cit.*, pp. 203-209; Simon, *op. cit.*, p. 28. 『アレシア』翻訳原文、一〇一一〇〇年頃。

(18) トマス・カーラー(近三金次訳)『ガロの歴史』Le Président Clerc, *Étude complète sur Alaise, Alaise n'est pas l'Alesia de César*, Besançon, 1860.

(19) 云上 Buchsenschutz et Schnapp, *op. cit.*, pp. 273, 285, 292-295; Athena S. Leoussi, *Nationalism and Classicism, the*

Classical Body as National Symbol in Nineteenth-Century England and France, London, 1998, pp. 181-182; Roger Facon et Jean-Marie Parent, *Vercingétorix et les mystères gaulois*, Paris, 1983, p. 12; Jean Tulard dir., *Dictionnaire du Second Empire*, Paris, 1995, pp. 24-27.

- (20) Buchsenschatz et Schnapp, *op. cit.*, pp. 281, 287; Musée des antiquités nationales, *Vercingétorix et Alesia*, Paris, 1994, pp. 205-209. [原型『民族起源』の癡想史] 『波羅坦』 1100年、18世紀～18世紀。
- (21) Simon, *op. cit.*, pp. 43-44, 49, 57; Claude Bellanger, Jacques Godechot, Pierre Guiral et al., dir., *Histoire générale de la presse française*, t. 2, Paris, 1969, pp. 351, 356.
- (22) Amalvi, *op. cit.*, p. 53; Simon, *op. cit.*, p. 64; *Vercingétorix et Alesia*, pp. 369-370. [アレクサンダー・マリス] 『神話説』 『ガリヤの英雄とナル・アイデンティティ』
- (23) 『アレクサンダーの死』 『アレクサンダーの死』 18世紀～19世紀。
- (24) 『アレクサンダー』 Daniel Fabre, "L'atelier des héros", in P. Centlivres, D. Fabre, F. Zonabend dir., *La fabrique des héros*, Paris, 1998, p. 271; Simon, *op. cit.*, pp. 103-104; Amalvi, *op. cit.*, pp. 59, 75-78; Ernest Bosc et L. Bonnemère, *Histoire nationale des gaulois sous Vercingétorix*, Paris, 1882, p. 454.
- (25) 『アレクサンダー』 Simon, *op. cit.*, p. 102; Amalvi, *op. cit.*, pp. 61-64; *Grand dictionnaire universel du XIX^e siècle*, t. 15, Paris, 1876, pp. 894-895; Claude Nicolet, *La fabrique d'une nation, la France entre Rome et les Germains*, Paris, 2003, pp. 278-279. 『アレクサンダー』 『アレクサンダー』 18世紀～19世紀。
- (26) Bosc et Bonnemère, *op. cit.*, p. VIII.
- (27) Christian Amalvi, "Vercingétorix dans l'enseignement primaire 1830-1940", in Viallaneix et Ehrard dir., *op. cit.*; Paul Gerbod, "L'enseignement supérieur français à la découverte des Gaulois", in *Ibid.*; Gérard, *op. cit.*; M. Martin Guiney, *Teaching the Cult of Literature in the French Third Republic*, New York, 2004, Part III; Ozouf, *op. cit.* p. 347.
- (28) Albert Malet, *Cours complet d'histoire, l'antiquité*, 6^e éd., Paris, 1908, pp. 373-374; Gérard, *op. cit.*, pp. 360-361, 363. 「軍隊は火ノ足ヲ持つて火炎」 雷と轟など云々燃え立つて火炎をもつて本国へ戻つた』 『ガリヤの英雄』 11世紀。
- ゲーティクスの所業に触れて「『ガリヤの英雄』 11世紀」
- (28) 渡辺和行「英雄のナル・アイデンティティ」 堤田耕馬・橋本伸也編『ネイバーハウスナリバーナの教育社会

史』昭和論、1100四年。渡辺和行「義務の共和国」服部春麿・谷川稔編『ハノハス史かの記』山川出版社、1100
○年。ムヘル・ヘラ（編訳）「ラヴィエ『国民の教師』」ヘラ編（谷川總監訳）『記憶の場』岩波書店、110011年。
(29) Ernest Lavisse, *La nouvelle année préparatoire d'Histoire de France*, 94^e éd., Paris, 1902. 教科書から改題が本校
ノウゼー（数々記入）マガジンへ。

(30) Ernest Lavisse, *La première année d'Histoire de France*, cours moyen, 66^e éd., Paris, 1904; E. Lavisse, *Histoire de France*, cours moyen, 17^e éd., Paris, 1921; E. Lavisse, *La nouvelle 2^e année d'histoire de France*, cours supérieur, 54^e éd., Paris, 1897.

(31) Gauthier et Deschamps, *Cours élémentaire d'histoire de France*, Paris, s.d., 1907?; Gauthier et Deschamps, *Cours moyen d'histoire de France*, Paris, 1906; Claude Augé et Maxime Petit, *Livre préparatoire d'histoire de France*, 54^e éd., Paris, s.d., 1900?; A. Seignette, *Histoire de France*, cours élémentaire, nouvelle édition, Paris, s.d., 1897?; Désiré Blanchet, *Histoire de France*, cours moyen, 104^e éd., Paris, 1890; Désiré Blanchet, *Histoire générale*, 3^e éd., Paris, 1884; André Grégoire, *Nouvelle histoire de France*, cours supérieur, nouvelle édition, Paris, 1884; H. Pigeonneau, *Petite histoire de France*, nouvelle édition, Paris, 1873; A. Magin et L. Grégoire, *Histoire de France*, nouvelle édition, 4^e éd., Paris, 1877; G. Ducaudray, *Histoire élémentaire de la France*, cours moyen, Paris, 1884; G. Bruno, *Le tour de la France par deux enfants*, cours moyen, 326^e éd., Paris, s.d.

(32) Félix Ansart, *Petite histoire de France*, nouvelle édition, Paris, 1875; Gustave Hubault, *Histoire de France*, cours supérieur, Paris, 1887; E. Wautier d'Halluin, *Éléments d'histoire universelle*, 3^e éd., Paris, s.d.; F. I. C., *Chronologie de l'histoire de France*, Tour, s.d., 1886?

(33) ハルカツアーチク女子中等教科書の上級者用として G. Ducoudray, *Histoire nationale et notions sommaires d'histoire générale*, première année, Paris, 1887, pp. 23, 36-40.

(34) ハルカツアーチク女子中等教科書の上級者用として G. Ducoudray, *Histoire nationale et notions sommaires d'histoire générale*, première année, Paris, 1888, pp. 23-26.

(35) Bosc et Bonnemère, *op. cit.*, p. V; Gérard, *op. cit.*, pp. 363-364.

(36) ル・エリヤ・ド・ローラン、独立期ガリアの文化を評価する「人間性」 (Fernand Braudel, *L'identité de la France*, t. 2, Paris, 1986, pp. 51-52)。十九世紀後半、「アレクサンデル・ガロ」の文化が教科書に記述の喪失は「ガロ人の」重の死」の報復、1805年後半から十八世紀後半・十九世紀初頭の「アレクサンデル・ガロ」の敗北による「アレクサンデルの道」が主張される (Facon et Parent, *op. cit.*, pp. 222-225; Pierre Lance, *Alesia, un choc de civilisation*, Paris, 2004)。

(37) 「アレクサンデル」 Jean Leclerc, "Enquête, les héros de l'histoire de France", *L'Histoire*, no. 33, avril 1981, pp. 102-112; J.-P. Albert, "Pourquoi les héros nationaux sont-ils souvent des vaincus?", in P. Cabanel et P. Laborie dir., *Penser la défaite*, Paris, 2002, p. 23; Denise et Pierre Cogny, "La « rhétorix » d'Astérix le Gaulois", in Paul Viallaneix et Jean Ehrard dir., *op. cit.*; Daniel Pageaux, "De l'imagerie culturelle au mythe politique, Astérix le Gaulois", in *Ibid.* E. Melmoux et D. Mitzimacker, *100 personnages qui ont fait l'histoire de France*, Bréal, 2004, pp. 6-7, 25; J.-P. Albert, "Du martyr à la star", in Centlivres, Fabre, Zonabend dir., *op. cit.*, p. 11.

(38) *Vérité ou fiction et Alesia*, p. 11.

(39) François Durpaire, *Enseignement de l'histoire et diversité culturelle, « Nos ancêtres ne sont pas les Gaulois »*, Paris, 2002.